

# 東北大学実践宗教学寄附講座 ニュースレター

Department of Practical Religious Studies  
Graduate School of Arts and Letters  
Tohoku University

第3号 2013年5月1日

パネル「東日本大震災と宗教者・宗教学者」の報告・・・2-3頁  
 ボス博士「あいまいな喪失」講演会報告（谷山洋三）・・・4頁  
 国際学会のお知らせ（スピリチュアルケア・パストラルケア）・・・5頁  
 第1回臨床宗教師研修後半報告（森田敬史）・・・6頁  
 臨床宗教師研修の趣旨（谷山洋三）・・・7頁  
 第3回臨床宗教師研修の概要・・・8-9頁  
 第2回臨床宗教師研修報告（高橋原）・・・10-11頁  
 第2回臨床宗教師研修受講者感想・・・12-14頁  
 新刊書紹介『看取り先生の遺言』（相澤出）・・・14-15頁

エッセイ「病院チャプレン」  
 （イーリー落合美歩）・・・16-17頁  
 活動報告・・・18-19頁



## 「臨床宗教師」の名称と資格認定について

東北大学実践宗教学寄附講座では2012年度より「臨床宗教師」研修を行なってきましたが、他団体が同じ名称を用いた資格認定を開始したことに関して、当講座との関係などお問い合わせを何件かいただきました。そこで、この際「臨床宗教師」の名称についての当講座の立場を明らかにしておきたいと思えます。

まず、「臨床宗教師」とは、英語の「チャプレンchaplain」の訳語として故岡部健医師が考案した名称ですが、公共的施設などで働く宗教者をさす一般名詞であると考えています。したがって、「臨床宗教師」という名称は、東北大学実践宗教学寄附講座が排他的に独占したり、他団体が使用するのを禁じたりすべきものではないと考えています。

その上で、今後も類似の名称を持つ資格等が増えていくと思われませんが、私達の目指している「臨床宗教師」の大きな特色は、超宗教・超宗派の協力と学びあいを通して養成される宗教者であるということであらためて確認しておきます。

次に、資格についての考え方ですが、私達は「臨床宗教師」の研修を実施し、修了証を発行していますが、これは高いレベルのケア能力の獲得を示すものであるというより、「臨床宗教師」として必要な基礎的な知識とスキルを身につけ、以後の終わることのない自己研鑽の歩みへのスタートラインに立ったことの証明であると考えています。

また、資格認定を行なうならば、有資格者の能力と資質、活動内容について長期的・継続的に機関として責任を持つべきであると考えますが、当講座は3年間の期限付きで設置された寄附講座であり、現時点ではそのような体制が整えられていないので、当講座が主体となって資格認定を行う予定はありません。

以上から、当講座としては、他団体が独自に「臨床宗教師」の名称を冠した資格認定を行なうことに対して制限を加えたり、異議申し立てを行なう立場にはありません。「臨床宗教師」の資格認定を行なう際には、「〇〇協会認定臨床宗教師」のように、認定団体名を付記することで、区別していくことにならうかと思えます。

将来的には、コンセプトを共有する諸団体が協力し、臨床の場を拡大して社会のニーズに応じていくことで、「臨床宗教師」という名称が一般社会に浸透していくことが望ましいと思っています。

なお、日本スピリチュアルケアワーカー協会からは事前に相談があり、上記の趣旨を説明しております。

2013年5月  
実践宗教学寄附講座

## パネルディスカッション

## 「東日本大震災と宗教者・宗教学者」のご報告

日時：2013年3月2日（土） 13:00-17:30 場所：東北大学マルチメディアホール

主催：東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座・宗教者災害支援連絡会  
京都大学こころの未来研究センター震災関連プロジェクト共催：東北大学大学院文学研究科・心の相談室  
世界宗教者平和会議(WCRP)・日本基督教団

## プログラム

開会の辞・総合司会：鈴木岩弓（東北大学教授）

基調講演：山折哲雄「宗教者と宗教学者は災害とどう向き合うか」

## パネル・ディスカッション

司会：鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）

報告：金田諦應（通大寺住職）「東日本大震災と仏教者」

川上直哉（仙台教会主任教師）「東日本大震災とキリスト者」

藤波祥子（八重垣神社宮司）「東日本大震災と神職」

黒住宗道（WCRP日本委員会理事・黒住教副教主）「東日本大震災と超宗派的組織」

稲場圭信（大阪大学准教授）「宗教者と宗教学者の連携」

黒崎浩行（國學院大学准教授）「宗教系大学の取り組みと宗教学者」

コメント：玄侑宗久（作家・福聚寺住職） 岡田真美子（兵庫県立大学教授・妙興寺）

島蘭 進（東京大学教授）

蓑輪顕量（東京大学教授・竜蔵寺）

閉会の辞：鈴木岩弓（東北大学教授）



会場には多くの聴衆が集まった。

3月2日に開催されたパネル・ディスカッション「東日本大震災と宗教者・宗教学者」は、司会をつとめた鎌田東二氏のほら貝とともに、震災で亡くなった人々への黙祷で幕を開けた。



阪神・淡路大震災の際の支援活動において、宗教者の影が薄いのではないかと山折哲雄氏が語ったことがこの企画の背景となっている（鈴木岩弓・開会の辞）。では、このたびの東日本大震災ではどうだったのか。宗教者、そして宗教学者はこの間の教訓から何を学び、どのように活動しているのか。それらを問い直す催しとなった。

山折氏は、阪神・淡路の時にボランティアとしてでなければ災害の地に入っていけなかった宗教者を見て、「宗教的言語がほとんど人々の心の奥

底に届かない世俗化した状況の真ん中に我々は生きていかざるを得ない」と痛感したという。しかし、「本質的に宗教的な契機を含む地震という災害と、この日本列島に住む人々は太古の昔からずっとつきあい、生き抜いてきた。そういう文化の中で生きた人間たちが無宗教だなどとは言えない。この地震列島によって日本人の宗教性、精神性というものが培われてきた。」と山折氏は、宗教者・宗教学者が考えるべき問題であるとして語りかけた。



また、福島原発事故の際の作業員撤退論に寄せて、近代文明の果実は引き受けるけれども、それに伴う犠牲の問題が未解決のまま横たわっていると指摘した。

山折氏は多くの死者を出した大川小学校跡地で聞いた般若心経と御詠歌の声に、映画『王将』で阪東妻三郎演じる坂田三吉が唱えるお題目を重ね合わせて、「最後はやはり祈りの力かな」という想いを強くしたという。近代的な社会科学の方法だけでは解決がつかない人間の問題を前に、「祈りの世界」にどのように自分を展開させていくべきだろうかという問題提起をもって講演は締めくくられた。

各報告者の発表内容をかいつまんで紹介する。

金田諦應師はカフェデモンクの二年間の活動を15分間で紹介し、真実は泥の中にしかなく、宗教者は泥の中にこそいるべきであると述べた。

川上直哉氏は、特に原発事故の影響をとりあげ、「震災はもう終わっていつている」という刺激的な言葉で、もう誰も特別扱いしてくれないけれども震災前に戻ることはできないという、被災者の日常にある孤立と不安について述べた。



津波で境内が全壊した八重垣神社の藤波祥子宮司は、被災者でもある立場から、社殿のなくなってしまった空間に手を合わせる氏子の人々の姿に祈りの原点を見たと言及し、人々が先祖代々親しんできた場所で神社を再興するという決断に至った想いを述べた。

黒住宗道氏は、世界宗教者平和会議の支援の取り組みについて報告した。宗教界からの募金を被災地に届け、押し付けにならないように支援させていただくという心がけを語るとともに、失われたいのちへの祈り、今を生きるいのちとの連帯、これからのいのちへの責任について語った。



稲場圭信氏は、宗教者の社会貢献活動について観察し、想像力を働かせながらそれを表現し、情報発信していくことを宗教学者に期待される役割として挙げ、そこから社会を巻き込む運動が生まれることもあると指摘した。



黒崎浩行氏は、國學院大学の学生たちが現地実際に足を運ぶことで神社

での祭りが人々の心の支えになっていることを再発見したという報告をまじえながら、建学の精神に基づいて宗教者育成の責務を持つ宗教系諸大学の活動について報告した。

福島県在住の玄侑宗久氏は、山折氏の講演を受けて、原発作業員がヒーローになるということは人権を犠牲にするということであり、人権を振りかざすと中間貯蔵施設は建設もできないと指摘し、これを宗教的問題として捉える視座を示した。

島蘭進氏は宮沢賢治に言及しながら、宗教者にも宗教学者にもかなしみが溢れる心に動かされていると述べ、支援者が被災者と立場が入れ替わるときに、ここが洗われるという体験について述べた。



岡田真美子氏は、山折氏の真意を聞いて阪神・淡路大震災以来ひそかに抱き続けてきたわだかまりが解消したと述べ、宗教者ではなくてもできる支援活動であっても、宗教者にはそれ以上の何かを感じさせると語った。



衰輪頭量氏は、原子力行政に関わる経産省の官僚の価値観を紹介しながら、人間の幸せとは何かを社会に向けて語っていくことが人文学の責任なのではないかと問いかけた。また仏教者が現場で得た知恵を資料として残し、次の世代に伝えていくことの責任と重要性について説いた。

鎌田東二氏は「電力から霊力へ」というフレーズを用い、目に見えないものへの感性を磨いていくことが必要なのではないかと提言した。各地域に神社と寺院が共存していることのありがたさが日本の底力であり、そこに悲しみと愛の宗教であるキリスト教が加わって東北の地で協力運動が生まれていることに期待を寄せた。

フロアから、「電力から霊力へ」というのはどうしたらいいのかという質問が寄せられ、巨大なものとなって人間から離れてしまった科学文明を、地元の人々の語る言葉や歌、祭り、笑いを通じて人々のこころと結びつけるという道が示された（島蘭・鎌田）。

また、三回忌の法要があつて宗教者が一生懸命祈ってくれているけれども、全然そこに行きたいとは思えない。素直に心が受け止められないのはどうしたらいいのか、という被災地からの声も届けられた。

最後に司会の鎌田氏から東北の拠点校である東北大学でこの会議を開催できたことの意義が確認された。鈴木岩弓教授は会場からパワーをいただいたと感謝の意を述べ、東北大学から宗教の力を世の中に活かしていくソーシャルムーヴメントを起していきたいという抱負が語られて締めくくられた。

翌3月3日は、鈴木岩弓教授のガイドで、被災地をバスでまわるエクスカージョンが行なわれた。相馬市立磯部小学校慰霊の像、宮城県山元町立中浜小学校、八重垣神社、名取市立閑上（ゆりあげ）中学校、閑上日和山、下増田神社等を見学し、それぞれの地で慰霊の祈りを捧げた。（高橋原）



八重垣神社にて

## ポーリン・ボス博士「あいまいな喪失」講演会報告

東日本大震災後に国内外のグリーフケアの専門家によって設立された JDGS (Japan Disaster Grief Support) プロジェクトは、行方不明者家族の支援や、原発事故による避難を余儀なくされた方々の支援を支えるため、第一人者であるポーリン・ボス Pauline Boss 博士を招聘した。

講演会に先立ち、被災地を自分の目で確かめること、そして日本の伝統文化を経験することが希望されていたため、2012年11月30日に名取市北釜地区にある下増田神社周辺、そして竹駒神社を訪問した。竹駒神社では、実践宗教学寄附講座運営委員である佐藤央千権 禰宜の歓待を受け、特別に本殿の正式参拝をさせていただいた。ボス博士や同行者たちにとってもまたとない素晴らしい機会であり、心から感謝し、感激していた。



(竹駒神社にて)

翌12月1日には、コラッセふくしまにて講演会が開催され(主催:日本家族研究・家族療法学会)、定員100名の会議室が満員になった。12月3日の講演会・ワークショップは実践宗教学寄附講座も共催し(主催:JDGSプロジェクト)、東京エレクトロンホール宮城にて行われた。医療・福祉・心理・宗教等さまざまな領域の専門家150名が参加した。講演の概要は次の通り。

「あいまいな喪失」には二つのタイプがあり、行方不明や故郷を喪失するなどの「心理的には存在しているが身体的には存在しない状態(さよならのない別れ)」と、認知症や引きこもりなどの「身体的には存在しているが心理的には存在しない状態(別れのないさよなら)」に大別される。「あいまいさ」は悲嘆を凍結させ、意思決定に混乱を生じさせ、対処を妨げる。喪失が周囲から認められにくい。そのため、あいまいな喪失は悲嘆を複雑化させる。しかしそれは、その人の病理からくるものではなく、状況がそうさせるのである。

このような状況にどのように対処するのか?まずは、「あの人はいなくなった、けれども今もここにいるように感じる」というような矛盾する2つの考え方を同時にもつと

いうこと、そして誰もが持っているレジリエンス(回復する力)に目を向ける。ボス博士は家族療法の立場から、家族やコミュニティでの日課や儀式から始めることを含む6つのガイドラインを提示した。

順番にこだわる必要はないが、ガイドラインは次の6つ。1) 意味を見つける、2) 人生のコントロール感を和らげる、3) アイデンティティを再構築する、4) 両価的な感情をノーマライズする、5) 新しい愛着の形を見つける、6) 希望を見いだす。具体的な行動としては、例えば次のようなことが役立つ。

- 1) 家族やコミュニティに伝わる儀式を現状に合うように行っていく。
- 2) 瞑想、祈りなどによって内なる自分自身を修練する。
- 3) 家族の境界や役割について柔軟になる。
- 4) 罪悪感や怒りが生じるのは「当然のことだ」と捉える。
- 5) 喪失した人やモノは心の中に存在するが、以前のままではないことを認める。
- 6) 不条理を笑い、答えのない問いを受けとめる。

グリーフケアという分野は国内では未発達だが、医療・福祉・心理など様々な取り組みが行われている。そして宗教もその一角を担う重要な専門領域であり、ボス博士は上記の1) 2) 5) のように宗教的な関わりを積極的に評価している。また、彼女の理論をそのまま日本に輸入するのではなく、日本の文化に合わせて活用することが強調されていた。

臨床宗教師としても学ぶところが大きく、大切な課題をいただいたように思える。臨床宗教師研修でも「あいまいな喪失」の講義を導入するきっかけとなった。

(谷山洋三)

### Pauline Boss博士



ミネソタ大学名誉教授。自身の体験から「あいまいな喪失理論」を提唱。行方不明者の家族、認知症患者の家族など、あいまいな喪失に苦しむさまざまな家族の支援経験をもち、9.11の米国テロの際にも成果を上げた。著書に『「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」』他。翻訳書として、『あいまいな喪失とトラウマからの回復—行方不明者家族へのケア(仮)』(中島聡美・石井千賀子監訳、誠信書房)が2013年に刊行の予定である。

2013年度 第6回日本スピリチュアルケア学会  
第10回アジア太平洋パストラルケア・カウンセリング学会  
合同学術会議

The 6th Japan Society of Spiritual Care and  
10th Asia-Pacific Congress on Pastoral Care and Counseling  
Joint Conference 2013

大会テーマ： 地水火風空：現代の自然・科学・技術の状況における宗教とケア

日程：2013年9月14日(土)～20日(金)

会場：東北大学北青葉山キャンパス、仙台市シルバーセンター  
主催：第6回日本スピリチュアルケア学会第10回アジア太平洋パストラルケア・カウンセリング学会 合同学術会議 実行委員会

共催：日本スピリチュアルケア学会 (JSSC)

Asia-Pacific Council on Pastoral Care and Counseling (APCPCC)

東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

概要：「スピリチュアルケア」「パストラルケア」「宗教的ケア」は、古来宗教者によって祈りや儀礼を通して提供されてきた。近代以降は、カウンセリングの技法が取り入れられ、医療・福祉施設などでも行われるようになった。国内ではまだ認知度が低い、ホスピス・緩和ケアの領域では理解されており、東日本大震災の被災者支援においても宗教者の活動が注目されている。今回の合同学術会議では、アジア・太平洋地域からこの分野に関わる宗教者や研究者が一堂に会し、特に震災における宗教関係者による対応にスポットを当てて、宗教の垣根を越えて活発な議論を行う。

主なプログラム：(下線を付したものは日英合同)

	JSSC(日本語)	APCPCC(英語)
9/14(土)	副大会長講演、理事会、 <u>総会</u>	オリエンテーション、 <u>理事会、懇親会</u>
9/15(日)	研究発表、記念講演、 <u>資格認定式、懇親会</u>	副大会長講演、記念講演、 <u>資格認定式、懇親会</u>
9/16(祝)	<u>パネル展示、公開講演会</u>	<u>基調講演、公開講演会</u>
9/17(火)		エクスカージョン(気仙沼、松島)
9/18(水)		講演、ワークショップ、 <u>役員会</u>
9/19(木)		講演、ワークショップ、 <u>総会</u>
9/20(金)		講演、ワークショップ、 <u>懇親会</u>

Keynote Address (英語・通訳なし)：

日時：9月16日(月祝) 10時～12時

会場：東北大学北青葉山キャンパス 理学部大講義室

参加費：3000円(公開講演会、パネル展示共通)

講師：木村 利人(早稲田大学名誉教授)

公開講演会：

日時：9月16日(月祝) 13時～17時

会場：東北大学北青葉山キャンパス 理学部大講義室

参加費：3000円(Keynote Address、パネル展示共通)

講師：森清範(清水寺貫首・北法相宗管長)

大井玄(元国立環境研究所所長・東京大学名誉教授)

島蘭進(上智大学教授・グリーンケア研究所所長)

パネル展示：

日時：9月16日(月祝) 10時～17時

会場：東北大学北青葉山キャンパス 理系総合棟205

参加費：3000円(公開講演会、Keynote Address共通)

内容：東日本大震災における各宗教団体の支援活動

パネル申込：下記ホームページ参照

HP：<https://sites.google.com/site/apcpcc201309/>

<http://www.spiritual-care.jp>

(日本スピリチュアルケア学会)

問い合わせ先：Mail: [apcpcc2013japan@gmail.com](mailto:apcpcc2013japan@gmail.com)

Fax: 06-6450-8652

合同学術大会役員：

名誉大会長：日野原重明(聖路加国際病院)

大会長：島蘭 進(上智大学)

学術顧問：大井 玄・ 柏木 哲夫

木村 利人・ 高木 慶子

副大会長：カール・ベッカー(京都大学)

鈴木 岩弓(東北大学)

典 礼 長：鎌田 東二(京都大学)

実行委員長：伊藤 高章(桃山学院大学)

谷山 洋三(東北大学)

実行委員：大河内大博(浄土宗願生寺)

葛西 賢太(宗教情報センター)

高橋 原(東北大学)

山本 佳世子(上智大学)

Stephan van der Watt(日本キリスト改革派教会)

## 第1回臨床宗教師研修・後半を終えて

実践宗教学寄附講座主催、第一回臨床宗教師研修の後半が終了しました。ここでは後半プログラムの概要をご報告させていただきます。また、この場を借りて、研修にご協力頂いたカフェ・デ・モンク関係者の皆様、石巻市の地元の僧侶の皆様、食品放射能計測所の職員の皆様、会場をお貸し下さった統禅寺さま（曹洞宗）、その他多くの皆様方に御礼申し上げます。なお、前半の概要につきましては、Newsletter2をご参照下さい。

### 研修データ（後半）

期間：2012.11.13-16

場所：統禅寺、食品放射能計測所、東北大学

受講者：12名（うち女性2名）

宗派内訳：曹洞宗、浄土真宗(2)、真言宗醍醐派、立正佼成会(3)、イスラーム、本門法華宗、孝道山本佛殿(2)、日本基督教団

前半の研修が終わり、およそ三週間が経過した11月13日のお昼頃、再び研修受講者が誰一人欠けること無く石巻駅に集結しました。三週間のそれぞれの成長を反映してか、心なしか一回り大きな存在として感じられました。

前半と後半の間にそれぞれの振り返りの中で挙げられていたのが、傾聴技術の習得はもちろん、宗教協力により自身の信仰や宗教実践を相対化することで、気づきがあったこと、さらに他宗教に触れることにより立ち位置は違っていても同じ方向性を目指しているという連帯感を感じられたこと、そして多くの同志と出会えたことが収穫となったようです。

研修初日は、集合後すぐに、開成ささえあい拠点センターに移動してカフェ・デ・モンクに加わりました。前半の研修にて二回経験していることもあってか、受講者も慣れた様子で設営から積極的に加わっていました。住人さん50人以上がご参加され、受講者それぞれがまさに傾聴に徹していました。11月ともなれば、少しずつ冬の訪れを感じるところでしたので、玄関脇に設置されました炭火セットも大活躍でありました。その後、二日後に予定されているカフェの案内をポスティングし、そのまま道の駅（上品の郷）に併設されている『ふたごの湯』で、おのおの至福の時を過ごされました。その後、宿泊場所としてお借りした統禅寺にて、谷山洋三准教授の指導の下、研修の振り返りとロールプレイングのグループワークが行なわれました。

研修二日目は、引き続き統禅寺にて、黒住教副教主の黒住宗道先生より講義「宗教間対話」、浄土真宗本願寺派の金沢豊師より講義「被災地支援」、そして会話記録のグループワークが行なわれました。日中に行なわれた行脚については、最初に日和山、次に渡波松原町まで車

で移動し、受講者それぞれが法華経系、浄土真宗、曹洞宗、イスラーム、キリスト教というグループに分かれて鎮魂の祈りを捧げ、お花を手向けました。



研修三日目は、いつもの日常儀礼後、川上直哉牧師より「人権擁護」の講義を受け、その後のカフェに備えて、相手の立場を尊重することを学びました。会話記録のグループワークの後、大森ささえあい拠点センターにて二度目のカフェ・デ・モンクの実習に入りました。初日のポスティングのおかげで、予想以上に多くの住人さんが参加して下さいました。前半の金田諦應師（通大寺）のご指導通り、受講者それぞれが相手とのスタンスを確認しながら話を掘り下げていました。カフェの後は、研修の振り返りのグループワークに続いて、夕食を兼ねた懇親会が行なわれましたが、この時間のおかげで受講者みんなの連帯感がより強固なものになったと言えるかもしれません。

研修四日目は、全体を通して最終日になるということもあり、これまでの七日間をじっくりと噛みしめるような感じでスタートしました。日常儀礼の後、仙台市内の食品放射能計測所を見学し、それを受けて、川上直哉牧師が講義「放射能の影響」を担当して下さいました。その後、場所を東北大学に移し、佐々木清志先生より講義「精神保健と医療（概論）」を受け、研修振り返りと成果報告のグループワークを行ないました。受講者それぞれが掲げた課題を再確認して新たな課題設定をする中で、谷山准教授の「設定した課題はどんどん変化する。だから終わりなき研鑽を積んでいくことが宗教者には求められている。」という言葉が深く印象に残りました。受講者それぞれが各自の現場に帰り、自分の課題をアップデートしながら、研修における学びや気づきをそれぞれの関わりに遺憾なく発揮されると、最後のプログラムである修了式の際に手にされた研修修了証書の重みが増していくのではないのでしょうか。

（森田敬史）

# 臨床宗教師研修の趣旨

谷山洋三

「臨床宗教師」は、日本的チャプレンとして、公共空間で布教を目的とせずスピリチュアルケア、宗教的ケアを提供する宗教者を指します。チャプレンの研修でよく知られているのは、アメリカで1920年代に始まったCPE (Clinical Pastoral Education、臨床牧会教育) です。北米やその影響を受けた国々では、この教育方法が主流になっています。日本には1960年代以降、キリスト者を中心いくつかのグループで「日本版CPE」が実施されてきました。私自身も2006年から「日本版CPE」のスーパーバイザーとして研鑽を積んできました。キリスト者と仏教者が協力したプログラムで、しかも対象を宗教者に限定しないという2つの点で画期的だったと思います。

しかし、パストラルケア (宗教的ケア) からスピリチュアルケアへと、宗教性を薄めていく潮流は、東日本大震災後の社会の変化に相応しいものではなく、在宅ケアにおいても宗教性は発揮されるべきだ、という故岡部健医師の信念が、この臨床宗教師研修のコンセプトを産み出しました。

臨床宗教師が日本的チャプレンであるように、臨床宗教師研修も日本的CPEと言っていいかもしれません。事前に生育歴や人生観を振り返ることで、自分自身を見つめ直す作業を行います。異なる宗教宗派の宗教者と交流することで、かえって自分自身の信仰を振り返り、信仰を深めることに繋がります。日常儀礼を分かち合うことで、異なる価値観を受容する訓練になります。逆に、受容してもらうという体験にもなります。

受講者は「信徒の相談に応じる立場にある者」なので、すでに様々な経験を持っています。しかしそれらの経験のほとんどは、寺社教会で「守られた」環境での、信仰を共有した「私的空間」でのものです。臨床宗教師は「公共空間」で活動するので、公共空間に入るための学びが必要になります。倫理やスピリチュアルケア、そして具体的な現場の特徴など、基本的な知識を習得してから実習に入ります。医療・福祉・心理など臨床家の養成には、supervised field experience が不可欠です。教室の中での学びには限界があります。実際の臨床現場での経験と、その振り返り、分かち合い、学び合いが、この研修の特徴と言えます。

自分を見つめ直し、知識を得て、臨床経験をし、その経験を振り返る。そして再度自分を見つめ直す、というサイクルが大切です。このサイクルの中で、自分自身の課題を見つけ、次の臨床で学び直し、さらに自己評価する。この繰り返しは、どのような専門職にも不可欠なことであり、特に宗教者にとっては、一生の間修行・修練・研鑽していくことは当然のことです。「自分自身の課題を見つけること」を習得すれば、臨床宗教師としての修行・修練・研鑽を一生続けることができます。その意味で臨床宗教師研修は、ゴールではなくスタートなのです。

この研修も決して完成品ではなく、発展途上です。研修自体も進化・深化して行かねばなりません。より多くの、多様な方々の参加によって、臨床宗教師として共に学び合い、研修そのものを発展させていきたいと思っています。

第1回臨床宗教師研修後半スケジュール(2012年11月)

5日目(11/13火)	6日目(14水)	7日目(15木)	8日目(16金)
朝食	朝食	朝食	朝食
日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G
宗教間対話 L ※2	人権擁護 L ※2	―仙台へ	―仙台へ
会話記録 G	会話記録 G	F食品放射能計測所	F食品放射能計測所
集会 1130石巻駅前	集会 1130石巻駅前	集会 1130石巻駅前	集会 1130石巻駅前
実習 F	実習 F	実習 F	実習 F
カフェデモンク 開成ささえあいセンター	カフェデモンク 開成ささえあいセンター	カフェデモンク 開成ささえあいセンター	カフェデモンク 開成ささえあいセンター
宿泊所へ	宿泊所へ	宿泊所へ	宿泊所へ
休憩	休憩	休憩	休憩
実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G
ロールプレイ G	被災地支援 L	夕食・懇親会	夕食・懇親会
日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G

第2回臨床宗教師研修スケジュール(2013年2月、3月)

(前半) 石巻・城裡寺		※1 (後半) 石巻・高福寺	
1日目(2/19火)	2日目(2/20水)	3日目(2/21木)	4日目(3/4火)
朝食	朝食	朝食	朝食
日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G
倫理 L ※2	地域と文化1 L ※2	宗教的ケア L ※2	スピリチュアルケア L
集会	集会	集会	集会
自己紹介・参加動機	自己紹介・参加動機	自己紹介・参加動機	自己紹介・参加動機
朝食	朝食	朝食	朝食
休憩	休憩	休憩	休憩
実習 F	実習 F	実習 F	実習 F
行脚 F (法山寺)	行脚 F (法山寺)	行脚 F (法山寺)	行脚 F (法山寺)
カフェデモンク 開成ささえあい拠点センター	カフェデモンク 開成ささえあい拠点センター	カフェデモンク 開成ささえあい拠点センター	カフェデモンク 開成ささえあい拠点センター
宿泊所へ	宿泊所へ	宿泊所へ	宿泊所へ
休憩	休憩	休憩	休憩
実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G
ロールプレイ G	ロールプレイ G	ロールプレイ G	ロールプレイ G
あいまいな喪失 L ※2	あいまいな喪失 L ※2	あいまいな喪失 L ※2	あいまいな喪失 L ※2
実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G
日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G
解散	解散	解散	解散
集会	集会	集会	集会
会話記録 G	会話記録 G	会話記録 G	会話記録 G
実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G	実習振り返り G
宗教間対話 L	宗教間対話 L	宗教間対話 L	宗教間対話 L
日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G	日常儀礼 G
夕食・懇親会	夕食・懇親会	夕食・懇親会	夕食・懇親会

L…講義 G…グループワーク F…実習

## 第3回「臨床宗教師研修」の概要

臨床宗教師として求められる現場を拡大し、普及を図るべく、被災地での実習（カフェデモンク、行脚、食品放射能計測所）に加えて、今回からは看取りの実習（岡部医院、長岡西病院ビハール病棟、シェアハウス中井）を取り入れます。第一回、第二回とは日程と実習地が異なり、長期・分散型となっています。全体のスケジュールと実習についての説明は下記のとおりです。

### 【開催日程】

4月から7月までの間に1泊2日の全体会を4回開催し、全体会とその次の全体会までの間を実習期間とする。

- ・講義とグループワークは、受講者全員が集まって1日もしくは1泊2日で実施する（「全体会」、と呼ぶ）。
- ・実習先は、岡部医院（見学）、カフェデモンク、仙台食品放射能計測所、長岡西病院ビハール病棟。
- ・受講者は最大18名とし、実習先ごとに5班に分ける（伊達、青葉、日高見、浪花、越州）。グループワークは2グループに分ける。
- ・実習は月1～2回程度として各自のペースに任せるが、次の全体会までに8時間以上経験する。
- ・受講者は、直接実習先に連絡し、現場担当者と相談して実習日程を決める。
- ・研修費は無料。交通費、宿泊費は自己負担。

	班	伊達	青葉	日高見	浪花	越州	
	定員	2～3名	2～3名	2～3名	3～4名	3～6名	
	実習先	岡部医院、カフェデモンク、放射能計測所	岡部医院、電話相談、放射能計測所	岡部医院、電話相談、カフェデモンク	シェアハウス中井（ビハール21）	長岡西病院ビハール病棟	
4月15日～16日	全体会1（開講）	開講、オリエンテーション、講義（理念、倫理、会話記録、カフェ、放射能）、グループワーク（日常儀礼、悲嘆）					オリ2h 講義10h GW3h
4～5月	実習期間1	カフェ(4h)、放射能(4h)	電話(4h)、放射能(4h)	電話(4h)、カフェ(4h)	ハウス(8h)	長岡(8h)	実習8h
5月13日～14日	全体会2	講義（現代宗教論、宗教的ケア、グリーフケア、ホスピスケア、在宅ケア）、グループワーク（日常儀礼、実習振り返り、ロールプレイ）					講義7h GW8h
5～6月	実習期間2	岡部(8h)	電話、放射能	電話、カフェ	ハウス	長岡	実習8h
6月17日～18日	全体会3	講義（公共性、人権擁護、宗教間対話、被災者支援）、グループワーク（日常儀礼、実習振り返り、会話記録）					講義5h GW10h
6～7月	実習期間3	カフェ、放射能	岡部	岡部	ハウス	長岡	実習8h
7月22日～23日	全体会4（修了）	グループワーク（日常儀礼、実習振り返り、会話記録）、修了式					GW7h 修了式1h
							講義22h、GW28h、 実習24h、他3h、 合計75h

<全体会1> 日程：2013年4月15日（月）～26日（火） 会場：浄土宗蓮光寺（仙台市太白区）

<全体会2> 日程：2013年5月13日（月）～14日（火） 会場：浄土宗蓮光寺（仙台市太白区）

<全体会3> 日程：2013年6月17日（月）～18日（火） 会場：曹洞宗統禅寺（石巻市鹿又）

<全体会4> 日程：2013年7月22日（月）～23日（火） 会場：浄土宗蓮光寺（仙台市太白区）、東北大学川内キャンパス

### <実習>

「伊達班」（2～3名）：岡部医院、カフェ・デ・モンク、仙台食品放射能計測所（東北ヘルプ）

「青葉班」（2～3名）：岡部医院、仙台食品放射能計測所、電話相談（「心の相談室」）

「日高見班」（2～3名）：岡部医院、電話相談、カフェ・デ・モンク

「浪花班」（3～4名）：シェアハウス中井（NPOビハール21）

「越州班」（3～6名）：長岡西病院ビハール病棟

※実習時間は、1ヶ月間に8時間以上 x 3ヶ月分 = 24時間以上、とする。

※全体会の中でも、行脚、カフェ・デ・モンクの実習を行う。



## ＜実習先＞

- ・岡部医院：故岡部健医師が設立した、医療法人社団爽秋会による在宅緩和ケアの専門機関。岡部医院スタッフの訪問活動に同伴し、がん患者の療養生活の場を見学（必ずしも患者さん・ご家族との対話ができるとは限らない）。訪問先は名取市内・仙台市南部、平日日中の訪問に帯同する。
- ・Café de Monk（カフェ・デ・モンク）：僧侶・牧師などが協力して運営している傾聴移動喫茶。石巻市など三陸海岸を中心に、仮設住宅の集会所でコーヒーやケーキを提供しながら傾聴活動を続けている。
- ・仙台食品放射能計測所：仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク（東北ヘルプ）が運営し、原則無料で食品などの放射能計測を行う。放射能に関する不安を傾聴する必要性から牧師や僧侶がチャプレンとして活動する。平日9時から17時まで。仙台市中心部のエマオ（日本基督教団東北教区）内。
- ・電話相談：「心の相談室」が運営する宗教者による電話相談窓口。牧師、僧侶、神職などが相談に応じる。水曜日と日曜日の15時から21時（前半3時間、後半3時間の当番制）。仙台市青葉区内のマンションの一室。
- ・シェアハウス中井：NPO法人ビハーラ21の僧侶、神職、介護職などが協力して、身寄りのない高齢者や精神障害者などが終の棲家として生活する場を提供している。ビハーラ僧1名が常駐し、数名のボランティアが関わる。実習は原則として平日の9時～17時だが、希望があれば夜間の宿直を体験することもできる。大阪市平野区。
- ・長岡西病院ビハーラ病棟：医療法人崇徳会が運営する仏教系緩和ケア病棟。病棟内に仏堂があり、朝夕に読経の時間がある。常勤ビハーラ僧の他に、十数名の地元の僧侶がボランティアとして関わる（超宗派）。実習は、ビハーラ僧の勤務にあわせて主として平日の8時15分～17時。新潟県長岡市。
- ・行脚：慰霊・鎮魂・追悼のために、祈り、読経をしながら被災地を歩く。

## ＜主な研修担当者＞

- ・谷山洋三（たにやま・ようぞう） 東北大学大学院文学研究科准教授、「心の相談室」理事、日本スピリチュアルケア学会評議員・同学会認定暫定指導資格、仏教看護・ビハーラ学会理事、元・長岡西病院ビハーラ僧。
- ・金田諦應（かねた・たいおう） 曹洞宗通大寺住職、「心の相談室」理事、傾聴移動喫茶Café de Monk主宰、自殺防止ネットワーク「風」会員・宮城県相談所運営。
- ・小西達也（こにし・たつや） 武蔵野大学看護学部教授、日本スピリチュアルケア学会理事・同学会認定暫定指導資格、元・米国アルタベイッツサミット・メディカルセンター・チャプレン。
- ・三枝千洋（さいぐさ・ちひろ） 仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク（東北ヘルプ）理事・食品放射能計測所担当、日本基督教団陸前古川教会牧師。
- ・三浦紀夫（みうら・のりお） NPO法人ビハーラ21ビハーラ僧・事務局長、真宗大谷派瑞光寺衆徒。
- ・森田敬史（もりた・たかふみ） 長岡西病院ビハーラ僧、日本スピリチュアルケア学会認定暫定指導資格、東北大学大学院文学研究科博士課程。



第1回研修受講者 石巻市統禅寺にて



第2回研修受講者 東北大学文学研究科棟前にて

## 第2回臨床宗教師研修報告

## 研修データ

期間：2013.2.19-21, 2013.3.4-6

場所：石巻市曹洞宗統禅寺、石巻市曹洞宗高福寺

受講者：12名(うち女性3名)

宗派内訳：曹洞宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、高野山真言宗(3)、日蓮宗、立正佼成会(2)、日本基督教団、天台寺門宗、融通念仏宗

地域：北海道、宮城、埼玉、群馬、神奈川、奈良、大阪、熊本

第二回研修は、二泊三日×2回の合宿形式で行なわれた。(全体スケジュールは5頁に掲載)。受講者は北海道から九州にわたり、女性僧侶3名が含まれたこと、平均年齢が高かったことが今回の特徴である。

研修初日は石巻市法山寺を起点に(表紙頁掲載写真)行脚を行ない、同寺北村暁秀副住職の先導で、津波で全損し廃院となった敬愛病院跡地、渡波魚市場埠頭で追悼の祈りを捧げた。当日は鎮魂ののぼりを掲げるのが困難なほどの強風が寒さを増し、素手をさらしていたために凍傷で指が伸びなくなった受講者もいたほどであった。



宿舎となった統禅寺に戻り、「カフェデモンク」(金田諦応師)、「臨床宗教師の理念」(伊藤文雄牧師)の講義が行なわれ、「悲嘆」のグループワークが行なわれた。

二日目は午前中に「臨床宗教師の倫理」(小西達也先生)、「公共性の確保」(川上直哉牧師)の講義があり、午後はカフェデモンクの実習となった。当日は取材のTVカメラも入っており、仮設住宅の集会所は満員であった。和やかな雰囲気の中で住民の方々との話も弾み、お地藏さん作りも行なわれた。宿舎に戻り、「現代宗教論」(鈴木岩弓教授)の講義が行なわれた。



カフェデモンクの傾聴実習を終えて

三日目午前には「スピリチュアルケア」(小西達也先生)「グリーンケア」(同)、「地域と文化」(木村孝禅師・吉田裕昭師)の講義が行なわれた。木村師、吉田師は小学校以来の幼なじみであり、石巻の葬儀の風習や石巻弁を教えてくださいましたが、台本に基づいて披露された石巻弁はさながらコントのようで、笑いがあふれた。



木村師・吉田師



小西先生

午後はロールプレイが行なわれた後、「あいまいな喪失」(黒川雅代子先生)の講義が行なわれた。



実は、前半二月の研修は谷山洋三准教授がインフルエンザのために参加できないというアクシデントに見舞われたが、岡部医院の小西達也先生に代役をお願いし、無事乗り切ることができた。

研修後半はやや寒さも緩んだ三月に高福寺を会場に移して行なわれた。初日午前中に「人権擁護」(川上直哉牧師)の講義を終えた後、震災後に遺体安置所となっていた南三陸町海蔵寺を起点に行脚を行なった。海岸沿いを歩く道すがら、手を合わせる地元の人々に迎えられるという体験をし、防災無線で避難を呼びかけ続けた職員が亡くなったことで知られる南三陸町防災対策庁舎で祈りを捧げた。



この日は予定を変更して南三陸のホテル観洋で入浴と食事を済ませて宿舎に戻り、グループワーク「会話記録」を行なった。



二日目は、午前中に「宗教的ケア」（谷山洋三准教授）の講義の後、二度目のカフェデモンクでの傾聴実習が行なわれた。この日も取材関係者が多く落ち着かないところもあったが、受講者は住民の方々とお数珠作りなどをして時を過した。



二度目のカフェデモンクを終えて

宿舎に戻り。講義「宗教間対話」（齋藤軍記先生）が行なわれた。齋藤先生は天理教多賀城教会長であり、宮城県宗教学法人連絡協議会会長を務められているが、あわせて天理教の「みかぐらうた」と「てをどり」による「日常儀礼」を特別に実演してくださった。津波の後、胸まで達す



る水にかきわけながら教会に戻ったときに、ひたすらみかぐらうたを唱え続けていたという石巻教会長さんのお話が印象的であった。

「日常儀礼」は基本的には 受講生が回り持ちで担当する。他宗教の儀礼に触れて自らの信仰を問い直す契機となり、今回の研修でも重要なものとして位置づけられている。研修前半では天台寺門宗、キリスト教プロテスタント、日蓮宗、高野山真言宗、浄土真宗本願寺派、後半では融通念仏宗、立正佼成会、真宗大谷派、曹洞宗の儀礼が行なわれ、お互いの宗教を学びあう機会とされた。同じ仏教でも用いる経典も読み方も違う。とりわけ在家出身の方には、自分の唱えるお経を宗派の違う面々が唱和するという体験は、深く心を動かされる体験であったようである。

三日目は仙台に移動し、食品放射能計測所の見学をし、あわせて講義「放射能の影響」（三枝千洋牧師）が行なわれた。さらに東北大学に移動し、「精神保健と医療」（甘糟郁氏・みやぎ心のケアセンター）、「在宅緩和ケア」（河原正典医師・岡部医院）の講義と、研修の成果報告と研修を振り返るグループワークが行なわれた。これらの講義は、今後医療機関や福祉施設と連携しての実習を行っていく際に、最低限の基礎知識を身につけ、医療者等の宗教に対する感覚を学ぶために実施されたものである。



甘糟郁先生



河原正典先生

修了式では大淵憲一東北大学文学研究科長より激励のことばとともに修了証書が授与され、厳寒の石巻に始まった第二回臨床宗教師研修は終了した。第一回の研修と同様に、受講者の皆さんは、各自の背景に応じて感じたもの、得たものをそれぞれの現場に持ち帰り、臨床宗教師としてどのような活動が可能なのか、模索を始めている。

（高橋原）



南三陸町戸倉海岸での鎮魂行脚 2013.3.4

## 第二回臨床宗教師研修 を終えて

第二回研修（詳細は10-11頁）受講生の方々から寄せられた感想文を紹介いたします。

吉尾天声（真宗大谷派）



臨床宗教師とは、人の苦悩や悲嘆が有り、そこからそれぞれの宗教が立ちあがっていく、その大もとの現場に立ち会うこと…臨床の場にいる宗教者ではなく、臨床の場で宗教者になっていくというのが臨床宗教師ではないのか。

これは、臨床スピリチュアルケア協会の研究会で、第一回臨床宗教師研修修了者の吉田・宇崎両先生がその研修内容についての発表をされた時、会場で聞かれていた方が言われた言葉です。

この言葉は、臨床宗教師の一面を言い当てた言葉の様に感じました。

今回の研修で、特に印象に残った事は、それぞれの宗教者の方々と寝起きをともにし、その求道の生活の一端を垣間見る事が出来たということと、課題を持って関わられている被災地の現場でともに活動が出来たという事でした。

それぞれの宗派の方が、それぞれの教えによって自己を問うてゆかれる形があり、日常儀礼や行脚では、その違いと共感するところが気づかされた様に思いました。

自分の信仰の形を手がかりに歩み、出会った求道者の方と交わり、臨床の現場に身を据える事によって、より自分の信仰が洗練されていく…。臨床宗教師の仲間とその現場は、自分を留まらせず、求道者・宗教者たり続けることを与えて下さるものではないのか…そんな思いが湧いています。

研修生の皆様、スタッフの皆様へ感謝し、これから共通の目標に向かって歩みを共にすることを誓いながら研修に参加しての感想とさせていただきます。

合掌

羽富文孝（高野山真言宗）



宗教間対話や日常儀礼はとても楽しかったです。

実は私は、以前勤めていましたお寺の建

前は真言宗でしたが、実

態は全宗派のお参りをしておりました。諸先輩方より真言宗以外の仏教の宗派のお勤めの次第を伝授され、お経の練習をしてからお参りに出ていました。

壇信徒さまからの許可は得ていましたが、各本山からの許可は得ていませんのでギリギリいやアウトの行為でした。

お寺に入ってから知りましたので様々なお叱り等は周りからはありましたが、苦悩と葛藤をしながら一年半程は勤めていました。邪道と言われたりもして僧籍も危うくなりましたので、円満な辞退を申し入れ現状のお寺に至っております。

一日のお参りスケジュールをいただく、壇家名・住所・電話番号の横に“宗派名”が書かれ、その宗派の経本を持ってお参りをするというスタイルなので、一軒一軒全て違う宗派のお参り…という事も珍しくありませんでした。

私は本当は楽しかったのです。

その中で宗派や宗教が違って行き着くところ（天国や極楽浄土）は一緒なのでは？と思いましたが、教主様やご本尊様の呼び名や行き方が違うだけではないか…とっていました。全く誰にも相談も出来ずに心に収めていました。

この研修により日常儀礼では他宗派・他宗教をされている皆さまのお姿を観て、その疑問や抱えていたモヤモヤが晴れ、やっぱりそうなんだ！と思えてとても有意義でもあり楽しかったです。

袈裟をかけ、数珠を持ちながら讃美歌を歌う。はたまた牧師様が合掌をしながら般若心経に加わる姿は、実に胸の奥がスーッと清々しく抜けわたる様に思えて、美しくもあり力強さも感じ

ました。そして何よりも調和や協調の尊さを教えていただきました。

やっと、堂々と他宗教・他宗派の儀礼や、聖職者様達と垣根を無くし関わられた事に感謝しております。

今後も宗教間対話や宗教間交流を積極的にしたいと思います。合掌。

井出存祐（日蓮宗）



研修を通して被災地で生きる人々の心を掴むことを「いかにするか」学ぶことができました。

自分自身が長年にわたって抱えていた疑問は、仏教教団の一員として所属している「個」が、果たして本当の仏教者、宗教者といえるのだろうか。ということです。この疑問を払拭させていただいたのがこの講義参加であったと考えています。その一つは宗教間対話と協力です。各宗教、教団の教師が真剣に学ぶ姿に感動を覚えました。

次に集団として、行動する宗教者の姿を金田老師を先頭に被災地現場に立ちあがった協力者は「カフェ・デ・モンク」の実践をなされました。この実践を体験させて戴き「異体同心」の大切さを覚えました。

宗教間対話と協力の講義がありましたが、宗教者の連携をもって諸機関への働きかけが必要と強く感じました。

臨床宗教師として大切なのは「スピリチュアルケア」をしっかり身につけることだと思いました。研修を終えて、自分の行動をどのように変えるか具体的に考えています。

1. 臨床宗教師の存在、位置づけをはっきり説明し、恥ずかしくない行動をすること。
2. 今までの経験をふまえた活動をもとに傾聴活動を深めること。
3. 仏教者、宗教者としての存在感を示すこと。

このような目標をもって行きたい。  
(完)

松谷寛元（高野山真言宗）



この度はこの様なご縁をいただきましたこと、諸先生方と神仏のご加護に感謝致します。私は、

地元仙台に住んでおり、約1年前から心の相談室の傾聴活動には参加させていただいておりました。電話相談での様々な宗教的背景を持つ諸先輩方との関わりから、臨床宗教家としての「感覚」を養いたいと思うようになり、今回の研修に応募しました。

計6日間、様々な宗教者・諸先生方と場をともにできたこと、そこで得た「和して同せず」の感覚が何よりの財産となりました。その中で特に印象に残ることを挙げれば、行脚と日常儀礼です。皆様との祈りのコラボレーションの感覚は、いまだに強烈に残っております。

研修参加後は、細々と悩んだり気になっていたことがあまり気にならなくなり、宗教者として私は何をしなければならぬか、という意識がより明確になりました。

私は、言語聴覚士でもあり、NPO法人認定スピリチュアルケアワーカーでもあるので、医療や介護、特にリハビリテーションが私の担当分野と自覚しております。微力ではありますが、これからも自分なりの実践に努めます。

金剛合掌

橋本高志

(立正佼成会/WCRP日本委員会)



「果たして、自分に尊い臨床宗教師の研修を受ける資格があるのか？」その問いと常に向き合いながらの全6日間の

研修でした。

最初のカフェ・デ・モンク実習でのこと、聴かせて頂きたいという気持ちが強すぎて、こちらから積極的に話かけることができず、ただただじっと耳

を傾けるのみでした。宗教者としての関わり方がわからず、「自分は一体何者であるのか？本当に宗教者であるのか？」という臨床宗教師としての根本的な問いを自分に投げかけました。しかしながら、そんな未熟な問いかけを自分に行い、苦悶する自分に対して、先生方や同じ研修生は温かく、そして熱意のこもった励ましや支えによって、「次は、積極的に訪問者に寄り添おう」という気持ちになることができました。

2回目のカフェ・デ・モンクで出会ったのは老婦人でした。話の流れから、彼女の仮設住宅に伺い、お話と読経をさせて頂きました。旦那様への供養を心から喜んで頂き、そこに集った方々と喜びを共有させて頂きました。その読経という行為は、彼女に対するスピリチュアルケアであり宗教的ケアであることを先生から教えて頂き、臨床宗教師がケア対象者に提供できるもの、そしてそこから目指すものをほんの少しでも感じられたのではないかと思います。

研修という貴重な経験を頂き、先生方やスタッフの方々、同期の研修生の皆さまには、感謝の念に堪えません。今後は、「どこでも現場になり得る」との先生のお言葉通り、自分の実践の場を探し、臨床宗教師になれるよう精進させて頂きたいと思っております。

以上

塩田明真（天台寺門宗）



私は一年一か月前にたまたま縁あった方を看取らせて頂いた事が此度の研修へのお導きでした。

悲しみと様々な葛藤が

尾を引いておりましたので、その様な心構えの者が勤まるのかととても不安でございました。こう言う研修に参加する人達は完成された人達だと思っていましたので自分の弱さは絶対に出さないと頑なな思いでいました。

しかし実際には全然違っておりまし

たので少々がっかり早く済ませて帰りたいと言う思いでした。この様な私を色々な方が助言し励まして下さいました。東北大学の関係者の方々、研修生の皆様有り難うございました。私も漸く臨床宗教師となるべく人としての生き方を学ばせて頂きました。深く感謝申し上げます。

合掌

神谷昌道（立正佼成会）



2月19日（火）～21日（木）と3月4日（月）～6日（水）

の前後期にわたって開催された「第2

回臨床宗教師研修」に

は、北は北海道そして南は九州から宗派の異なる伝統仏教、キリスト教、そして新宗教に属する12名の宗教者が参加しました。

今回の研修は、「講義」、「グループワーク」、「傾聴」実習、鎮魂の「行脚」、「特別講義」などで構成されておりました。また「日常儀礼」として朝夕、各宗教・宗派の「お勤め」を体験できたことも有意義でした。

今回の研修で得た学びの中で特に、臨床宗教師が習得すべきスキル（技能）である「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」に関する理解が深められたことが大きな収穫でした。

「スピリチュアルケア」とは、ケア対象者（相談者）がケア提供者（臨床宗教師）の信仰や価値観に束縛されることなく、ケア対象者の内面の自己表現をサポートするもの。ケア対象者は、基本的に自分自身で自らの生き方を見出していきます。ケア提供者はその援助をするのみ。具体的な指示や命令はしないとのこと。

他方、「宗教的ケア」は、特定宗教の枠組み（教義や儀式）を基盤として、あるべき生き方や精神生活の実践をサポートするもの。いわば宗教的ケアは、ケア対象者がケア提供者の「世界」に入ること。つまりケア提供者の信仰世界をケア対象者が是認することが前提となっている、と教えていただ

きました。また、こうした「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」の相違点に留意すれば、現場に出向く臨床宗教師に期待されるのが、多くの場合「スピリチュアルケア」だそうです。

医療（ホスピスのみならず通常の医療）、福祉、教育、軍隊、警察、消防、刑務所あるいは企業などで活躍する欧米型チャプレンを模範として位置づけ、そこに日本の風土、宗教的土壌、あるいは現代日本における宗教と社会の関係を考慮した上で、日本版の臨床宗教師を育成し、かつ、臨床宗教師が活躍する公共の場所を造り出していくことが、東北大学実践宗教学寄附講座「臨床宗教師研修」の目指すところであると理解させていただきました。

いまだに「チャプレン」の文化が根付かない日本社会において、臨床宗教師の制度を確立させて運用していくには、長い年月がかかるものと思われます。しかしだからこそ、臨床宗教師の発案者であられる岡部健医師（故人）の遺志を引き継ぎ、有能な講師陣が東北大学に集まって臨床宗教師育成の取り組みが始まったのだと思いました。その崇高な目標に向かって、私個人のみならず、私が属する教団も、たとえ微力であっても何らかの貢献ができればと思っています。

合掌

米本智昭（高野山真言宗）



「これから行います枕経とは、本来はお亡くなりになられる人が不安にならぬ様に、枕元でご家族と死をみとりながらお経をあげる事でございます。」

私は何度この台詞をご遺族にお伝えしてきただろう。冷たく響く「本来」という言葉。

「では、お前はなぜそこで僧侶としての本義に戻ろうとしなかったのだ？」

この研修中、義憤は止まらず、自問

自答が続いた。なぜなら、臨床宗教師として宗派という服を脱ぎ、袈裟を取っても尚、自分は宗教者であると叫べる自信が無かったからである。

ところが仮設住宅の集会所で「傾聴」をさせていただいた時、そんなことはすっかり頭から消えていた。目の前の方と一緒に涙を流し、しっかりと手を握っていた時、私は一人の人間として寄り添うという事の力強さを知ったからだと思う。

そこに到るには素晴らしいスタッフの方々の支えがあったからこそである。異なる宗教の仲間達と明け方まで腹を割って語りあうことが出来たからである。この研修は私にとって、かけがえない宗教体験であった。

宗教的資源を公的な場へ還元してゆくということによって、ケア対象者に寄り添う事が可能になり、その方のベリーフ（信念・価値観）をサポートしてゆく事が出来るならば、私は一生、臨床宗教師でありたい。それこそが、僧侶として本義に返る事だと信じている。



仙台城趾の桜

新刊書紹介

奥野修司『看取り先生の遺言』文藝春秋社、2013年

相澤 出



生前、岡部先生（以下、先生）は多くの方から、本を書くよう勧められていた。しかし、先生はついに一冊のまとまった著作を出さずに亡くなってしまった。今思っても、とても残念である。しばしば先生は「どうも書くのは苦手なんだよな」と言っていた。一人で机に向かって原稿を書くのが好きではないという。相手が目の前にいる時、対話をする時に最も頭が動き、新しいアイデアも湧いてくる、だけど机に向かって一人で文章を書くのは楽しくない、すでに分かったことを書くのもおもしろくない、というのがその理由だった。机を前にしての一人での執筆が苦手な先生は、講演では聴衆の関心を惹いてやまない話し手であり、研究会や飲み屋で談論風発して時を忘れるという対話、議論を愛する人であった。先生は何といっても、生き活きた話し言葉の人であった。そのような話し言葉が、まさに岡部節のままに一冊の本にまとめられた。奥野修司氏という聞き手・書き手に恵まれたことは、文字通り有難いことであった。「はじめに」にあるが、奥野氏は先生が亡くなるまで9か月にわたり密着取材し、しかも話し言葉をそのまま活かしてこの本を作った。本書を手にした時、読み手は先生の話し言葉を耳にするかのように、読み通すことができる。その内容であるが、以下のような

構成になっている。

はじめに

第1章 余命十ヶ月

第2章 抗がん剤は薬ではない

第3章 治らないがん患者のための医師に

第4章 家で死を迎えるということ

第5章 「お迎え」は死への道しるべ

第6章 大きな命の中の存在

第7章 死への準備

対談「日本人の魂はどこに行くのか」

あとがき

まず第1章、第2章である。この二つの章では、先生がいかにご自身のがんと対峙したか、どのように治療しようとしたかが綴られている。第3章は岡部先生の医師としてのあゆみ、在宅緩和ケアへと至る過程が記されている。そこではさまざまな現場での体験、印象深い患者との出会いが述べられている。第4章では未開の領域であった在宅緩和ケアの世界での先生の試行錯誤がふりかえられている。この経験のなかで先生は在宅緩和にはチームケアが不可欠との確信を得る。ここに臨床宗教師が加わることが先生の念願であった。第5章は、在宅の現場で掘り出した重要な論点としての「お迎え」についてふれている。東日本大震災とその後の先生の活動は、心の相談室、実践宗教学寄附講座や臨床宗教師の実践へとつながるが、その詳細が記されているのが第6章である。第7章は、先生の亡くなるまでの日々の記録である。カール・ベッカー氏との対談は、議論を愛した先生の最後の学問的対談の記録であり、まさに遺言といえよう。

個人的には第1章、第2章を注意深く読んでいただけたらよいなあ、と思っている。ここには医師としての先生の姿、ものの見方、考え方が抽象的ではなく、ご自分という症例の検討を通して、具体的に見えてくるからである。その語り口には、先生が世間で権威をおびてまかり通っている通説に対して問題提起する時の、挑発を交えた独特の口調が現れている。それゆえ世間から過剰に同調されることもあれば、逆にひたすら拒絶されることもあった。例えば、本書でのそうした論点のひとつは、抗がん剤に対する評価であろう

(第2章)。しかし、細部に注意しながら読んでいただきたいが、実は先生の議論には安易で無暗な断定はない。論拠とその説明はもちろん、例外に対する目配りも欠かさない。治療法の意義と限界への評価も細やかである。先生の挑発は、議論のための議論をよぶためのものではない。経験、観察、理論や学説の検討を重ねた上で、自分の頭で考えぬいたものである。その徹底ぶりは、外科医としては目の前のひとりの患者を助けるために、緩和ケア医としては「個人史」をもった患者と家族のQOLの向上のために発揮された。

とくに第3章にある外科医時代の回想からは、患者の生死をあずかった経験の重さと、先生が終生向き合っていた様子がうかがわれる。医師としての患者と家族への責任、治療上の責任、治療の有効性と限界を考え抜くことへのこだわりはここに由来するように思われる。そうした姿が垣間見れる一例として、予後の判断の問題がある(90～92頁)。先生はよく「予後なんて医療には分からない。まず外れるよ」といっていた。それは現場での経験はもちろんだが、予後予測の根拠となる統計データの性質をも踏まえた上での発言でもある。医師の発言は患者と家族の希望を奪いかねない、命をも縮めかねない恐れがあることを先生はよく知っていた。ゆえに、医師には不用意な物言い(それは無責任の現れである)を戒め、丁寧に説明を尽くし、さまざまな可能性(選択可能な方法、それぞれのメリット・デメリット)を開示した上で、主治医としての判断とその根拠、見通しを明晰にするよう要求した。

医療だけではない。学問全般にも、方法の意義と限界について常に自覚的でなければならないと強調し続けた。EBMについても、先生はその意義を高く評価しつつも、その使い方や限界に医療界があまりに無頓着であると警鐘を鳴らしていた。合理的、科学的な態度をもつことと「科学教の信徒」であることは、似て非なるものであると本書でも述べられている(222～224頁)。その批判的な視線は、狭義の医

療の問題にとどまらず、不合理・不条理なものを全て切り捨ててきた日本の近代化の問題点への歴史的な関心にまで及んだ。先生は自宅での看取りを取り戻し、地域に看取りの文化を取り戻す在宅緩和ケアを「文化運動だと思っている」(150頁)というが、それは近代日本のあり方への根本からの挑戦でもあったからである。

ただし、先生は医師として医療の合理性にこだわり続け、医療にできる最善を尽くすのに労を惜しまなかった。それゆえに医療の限界に敏感でもあったし、トータルなケアとしての緩和ケアにおいて医療の最善を尽くすためにも、他職種とのチームケアを追求した。「チームケアの基本は自分のできないことを知ること」(152頁)と考える先生にとって、専門外の領域に中途半端に手を付け、かえって医療水準を下げるなどQOLの維持向上からして本末転倒である。関心を持ちつつも、専門性をもつ人に任せるべき重要な領域がスピリチュアリティであり、ケアチームに臨床宗教師が求められた理由はそこにあった。

はなはだ偏った紹介になってしまい恐縮であるが、在宅緩和ケアを自力で開拓した医師が、臨床宗教師というプロジェクトに期待して止まなかった理由を、本書から直に聞き取っていただけたら幸いである。(あいざわ・いずる 爽秋会岡部医院研究所研究員)



宮城県亘理郡山元町中浜小学校付近から海岸方向を臨む

## 病院チャプレン ～医療機関におけるスピリ チュアルケアinミネアポリス



イーリー落合美歩  
Abbot Northwestern Hospital  
Chaplain Resident

私は現在アメリカ中西部のミネアポリスという街で「病院チャプレン」として働いています。実践宗教学講座に興味をもっておられる方々は「チャプレン」という言葉を耳にしたことがあると思いますが、一般の方々には病院チャプレンといってもイメージがわきにくいかもしれません。

私も日本にいる時はチャプレンという言葉は知っていても、実際の仕事の内容は全くといっていいほど知りませんでした。私は函館で東方正教徒（中東・東欧に普及したキリスト教派）家庭に育ったため、幼児期からキリスト教の影響を受け、キリスト教神学を勉強するため同志社大学院を経てアメリカの大学院に進学しました。シカゴのロヨラ大学に通っていた頃、病院チャプレンとして働いているクラスメートがチャプレンとしての経験を授業中に話してくれました。彼の話す「入院中の患者や家族に寄り添い、心のケアを施す」チャプレンの仕事に興味をひかれ、自分でも挑戦してみたくなりました。

シカゴのRush University Medical Centerという総合病院でチャプレンの登竜門であるインターンシップを経験し、そこでチャプレンの基礎を学んだ後、主人の仕事の関係でミネアポリスに移り、ミネアポリス市内の

総合病院でチャプレン“レジデント”として働くことになりました。お医者さんに“研修医”期間があるように、チャプレンにも段階があり、“レジデント”はまさしく働いて学ぶチャプレン養成期間です。チャプレンレジデントにはそれぞれの担当病棟が割り当てられ、同時に神学、心理学、様々なスピリチュアルケアの方法論を学びつつ、入院患者、その家族、そして病院スタッフたちへスピリチュアルケアを実践していきます。

現在私が働いている病院はAbbot Northwestern Hospitalという病床数600の大規模総合病院です。ミネアポリスのダウンタウンからさほど遠くないところに立地しており、職員数は5000名、そして医師数は約1600名を数えます。この病院は特に心臓移植の成功率で有名なため、毎日のようにミネソタ州やウィスコンシン州、ノースダコタ州の各地からヘリコプターで患者が運ばれてきます。さらに近隣の中・小規模病院からも複雑な病状の患者が運ばれてくることが多々あります。私は主に神経科病棟、救急医療病棟、そして摂食障害患者を担当しています。

それぞれの病棟に特色があり、さらに患者さんやスタッフの出自は多岐にわたるので、日々新しい発見の連続です。ミネアポリスはスカンジナビア系の移民が多く、宗教的にはルター派プロテスタント教徒が圧倒的多数です。アイルランド系移民の影響も強く、カトリック教会がルター派に続きます。さらにベトナム戦争後にラオスの少数民族モン族を受け入れ、最近ではソマリア難民の居住地として指定されているため、近年ミネアポリスの多文化化が一段と進んでいます。

ちなみにAbbot Northwesternにはソマリア人、チベット人、エチオピア人の職員が多く、彼らは私をみると必ず「どこから来たの？チベット？中国？」と尋ねます。病院では多種

多様な人種・文化的背景に配慮するため、宗教のエキスパートであるチャプレンの存在は欠かせません。宗教的な配慮の例として、病院内のチャペルにはキリスト教、イスラーム、ユダヤ教、仏教の出版物を常備しています。

現在、私のいる病院には残念ながらイマーム（イスラーム教指導者）もラバイ（ユダヤ教指導者）もいないので、チャプレンは連絡役としてモスクやシナゴグに宗教指導者の派遣を依頼することもあります。もちろん、「祈る」という行為はどんな宗教にも通ずるので、チャプレンは個々の宗教的背景を考慮しつつ、宗教の壁を超えて患者さんやその家族と祈ります。例えば、先日神経科にイスラームに改宗した若いアメリカ人の男性患者が入院しました。脳外科手術の後痛みが続いたため、スピリチュアルケアの依頼が私にはありました。彼は私に対してとても気さくに自分の改宗の動機を話してくれました。その後、患者さんと彼の婚約者と一緒に頭の傷が癒えるように祈りました。「祈り」の力が普遍的であることを実感しました。

チャプレンとして働くうちに、気付いたことがあります。それは、患者さんたちの病状そして文化・宗教的背景の違いはありますが、入院患者そしてその家族の大多数が入院中に心の問題、いわゆる“スピリチュアルペイン（心理的、霊的な痛み）”を経験するということです。

健康で全く病気の心配がない時、だいたい人は「自分は健康で、仕事に行けて、友達とも会えるし、気持ちも落ち着いているし、誰かに頼ることはないだろう」と考えます。ところがある日突然激しい腹痛で立つこともできず、どうしても病院に行かざるを得なくなったとします。（実際、救急病棟にはこのような状態の人があふれています）。数時間後、急性盲腸炎で手術を要するほど



の危険な状態に陥った時、皆さんはどんなことを考えますか。さらに、家族も緊急手術にかけつけました。こんな時、患者さんとその家族たちは心のなかで何を思うのでしょうか。

おそらく「痛みをなんとかしてほしい、会社に連絡しなければ、友達との約束キャンセルしないと、手術がうまくいくかどうか不安、なんで自分がこんな目に」といった様々な思いが交差すると思います。特に「なんで自分がこんな目に」という感情には、出口のないトンネルにほうりこまれたような気分がよく表れています。人間は誰しも生きていくうちに何度かは病気に見舞われます。経験したことの無いような痛みへの不安、病気治癒への不安、さらに持病との戦い、こういった病気に対する複雑で不安な気持ちこそが“スピリチュアルペイン”です。私もICUや救急病棟で「なんで私が（もしくは家族の一員が）こんな目に遭うのだ」という叫びを幾度も耳にしました。人間は日常生活の様々な現象に意味を見いだす生き物です。自分の生命に危機が訪れた時、「なぜ私が？」という疑問、憤り、不安というスピリチュアルペインとどう向き合うのでしょうか。

残念ながら「スピリチュアルペインへの向き合い方」というマニュアルは存在しません。個々人のスピリチュアリティは十人十色、一人一人の心はみんな違いますから。「自分にはスピリチュアリティなんて関係ないし、そんなこと考えたこともない」という人もいるでしょう。もしかすると、日本人のほとんどがそう考えているかもしれません。でも、ふと何かをきっかけに不安や恐れを感じることもあるでしょう。また、喜びや満足感を感じる場合もあるでしょう。こういった感情の起伏とスピリチュアリティは切り離せない関係にあります。特定の宗教に属していなくても、誰しもが「聖なる」空

間もしくは状態を感じることもあると思います。私はよく、誰しもが「聖域」を備えている、と患者さんやその家族に説明します。入院など危機が訪れたときはその「聖域」が侵されるほど心がダメージを受けます。チャプレンはその危機を乗り越えるための道標を見つけるサポーターです。道標を見つけるのは容易ではありません。みつけるためには準備と知識が必要です。実践と学習を繰り返す日々のなかでチャプレンとしての自信と独立精神を養い、スピリチュアルケアのプロフェッショナルへの道を目指します。

正直なところ、異国の地で心の問題を扱う仕事に従事するとは思ってもありませんでした。英語の問題だけでなく、宗教的背景、文化的背景、私には越えなければならないハードルがいくつもあります。病院という生死に関わる現場で仕事をするという責任感におし潰されそうになることもあります。女子高生の突然死や子宮内胎児死亡を宣告された女性など、これまで数多くの悲劇に遭遇してきました。病院という生死に関わる場所にいるのは頭では理解していても、やはり悲劇の立会人になるというのは心苦しいものです。

しかし同時に、チャプレンという仕事を通して沢山の出会いに恵ま

れ、かけがえの無い経験をさせていただけるとはとても幸せなことです。ミネソタの人々に自分はプロテスタントでもカトリックでもないということをお話すると、大抵の人は「神さまほどの宗教でも一緒だよ」と受け



ソマリア人の看護師さんと

止めてくれます。前述したように、チャプレンは特定の宗教の枠を超えたスピリチュアルケアの実践者です。私には日本人正教徒として自分のスピリチュアリティをしっかりと見据え、多種多様な背景をもつ人々へのスピリチュアルケアを確立するという課題があります。学問的な知識も必要ですが、何より病院での実践を通して人間の心の在り方を追求することがチャプレンとしての自分に課せられている使命です。今後も緩和ケア、終末期医療など多様なテーマを学びつつ、患者さんやその家族と真摯に向き合っていこうと思います。



病院内のチャペル 毎朝、瞑想と祈りの時間が持たれる。どんな宗教の人も受け入れやすいように装飾が抑えられている。

## 活動報告

### 《2013年度前期開講科目》

授業名：グリーンケア論

担当者：谷山洋三

内容：悲嘆とその対応の一つとしてのグリーンケアについて基礎知識を得る

登録者数：32（大学院文学研究科5、文学部26、科目履修生1）

授業名：仏教福祉学

担当者：谷山洋三

内容：いくつかの事例から仏教者による社会福祉活動のあり方とその研究方法について学ぶ

登録者数：20（大学院文学研究科16、文学部4）

授業名：宗教と心理

担当者：高橋原

内容：ユング心理学の概説を中心に、宗教者による心霊現象への対処を念頭におきながら、広く宗教と心理について考える。

登録者数：108（法学部1、文学部100、大学院文学研究科7）

授業名：大学院研究演習

担当者：高橋原

内容：

*Clinical Handbook of Pastoral Counseling*, vol. 1-3 (Paulist Press, 1992-2002), *Professional Spiritual and Pastoral Care: A Practical Clergy and Chaplain's Handbook* (Skylight Paths Pub, 2011)から、いくつかの論文を選んで購読する。

登録者数：4（大学院文学研究科4）

### 《発表・講演》

12月12日 谷山洋三「臨床宗教師の臨終行儀」浄土宗宮城教区教化団（於仙台ガーデンパレス）

2月7日 谷山洋三「スピリチュアルケアと宗教的ケア」かたらい・るーむ・けやき（於かたらい・ほっと・るーむ）

2月16日 谷山洋三『災害に向き合う』出版記念ワークショップ「弔いとグリーンケア：被災地での宗教者の取り組み」（於東北大学）

3月4日 鈴木岩弓「東日本大震災後の心のケア—東北大学における臨床宗教師構想—」日本記者クラブ会見シリーズ企画「3.11大震災」

3月5-6日 鈴木岩弓「臨床宗教師—震災後の宗教学—」筑波大学集中講義

3月10日 鈴木岩弓（出演）『Sunday Morning Wave』Date FM（8:25-8:55）

4月14日 鈴木岩弓（出演）『内館牧子のエコひいきな人々』TOKYO FM他全国33局ネット（5:00-5:30）

### 《論文・寄稿》

鈴木岩弓「霊と肉と骨—現代日本人の死者観念—」（第56回智山教学大会講演）『智山学報』第62輯、大正大学真言学智山研究会、1-49頁。

鈴木岩弓「『宗教』と『信仰』」「『すいとく』第705号、竹駒神社、1頁。

鈴木岩弓「東日本大震災後の『絆』再興にみる宗教の“ちから”」『宗教研究』86-4、2013年、22-26頁。

谷山洋三「第2章 チャプレンの働きとその課題—スピリチュアルケアとグリーンケア」『スピリチュアルケアの根底にあるもの』窪寺俊之監修、遊戯社、2012年、25-42頁。

谷山洋三「『心の相談室』のその後と臨床宗教師」『宗教と現代が分かる本 2013』渡邊直樹責任編集、平凡社、2013年、26-31頁。

谷山洋三「被災地から見た『臨床宗教師』の可能性と課題」（発表要旨）『宗教研究』86-4、2013年、107-108頁。

高橋原「ユング心理学的観点からの夢の解釈」『夢と幻視の宗教史 上巻』河東仁編、リトン、2012年12月。

高橋原「帝国大学に於ける宗教学の展開（東北編）」『東京大学宗教学年報』XXX（特別号）2013年3月。

高橋原「ケアにおける宗教性再考」（発表要旨）『宗教研究』86-4、2013年、103-104頁。

高橋原「臨床宗教師研修 15人が長期型実習」中外日報、2013年4月18日。

高橋原「臨床宗教師の可能性—被災地における心霊現象の問題をめぐる—」『現代宗教2013』国際宗教研究所、2013年5月。

## 《新聞報道等》

河北新報 (2012年12月15日)

東北大が「実践宗教学」講座

宗派を超え心のケア

臨床専門家の育成を図る

(佐藤素子)

仏教タイムス (2013年1月1日)

東北大学実践宗教学寄附講座「臨床宗教師研修」取材レポート

臨床と教義の懸隔に向き合う

(共同通信編集委員 西出勇志)

朝日新聞 (2013年1月14日)

惜別

医師 岡部健さん

死と向き合い 宗教見つめ直す

(編集委員・森本俊司)

西出勇志 「臨床宗教師」は闇の中の道標になるか?

『中央公論』 (128-1、2013年1月号)

河北新報 (2013年3月3日)

「祈り 復興の力に」

仙台でシンポ 宗教活動 役割探る

河北新報 (2013年3月5日)

祈り 天に届け 南三陸

鎮魂思い込め宗教者が行脚

河北新報 (2013年3月7日)

喪失と向き合う～支援の現場から～

(中) 行方不明者の家族

瀬藤乃理子 (甲南女子大学准教授)

前進へ語り合いの場を

【TV】NHK(Eテレ)「こころの時代～宗教・人生～／宗教の時間」 (2013年3月10日)

河北新報 (2013年3月11日)

東日本大震災2年 遺族の悲嘆 長く深く

自分を責めず祈って 東北大学准教授 (臨床死生学) 谷

山洋三さん

仏教タイムス (2013年3月7日)

東北大で震災パネル討論

山折氏 倫理を問う

日本記者クラブ会見 シリーズ企画「3.11大震災」  
(2013年03月4日)

鈴木岩弓教授

司会 露木茂 日本記者クラブ企画委員

仏教タイムス (2013年3月14日)

東北大・震災パネル討論

「終わりつつある」の声も

宗教者と学者の協力を促す

西日本新聞 (2013年3月10日～14日)

「ともに 大震災と宗教者」(1)

被災地に祈りの行脚 教義を超え悲嘆に寄り添う

臨床宗教師

「ともに 大震災と宗教者」(2)

心を聴き 一緒に「悶苦」 移動喫茶モック

「ともに 大震災と宗教者」(3)

暮らしの灯 ここにいる 木の枝の十字架

「ともに 大震災と宗教者」(4)

胸の内 思いを受け止め 霊的体験

「ともに 大震災と宗教者」(5)

祈りの原点 ここで再び 小さな社

河北新報 (2013年3月23日)

こころ 信仰 社会 人生

実践と社会貢献 意識

大学に養成講座

連携の動き紹介

【TV】NHK WORLD TV "JAPAN 7  
DAYS" (2013年3月22日)

Caring Comes Calling

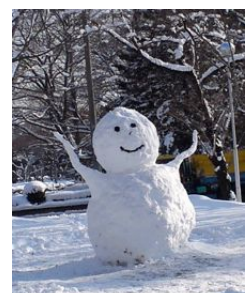
中外日報 (2013年4月18日)

臨床宗教師研修

15人が長期型実習

病院や福祉施設で

東北大寄附講座



雪だるま@川内キャンパス

## 寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。寄附者の方々にここに記し感謝申し上げます。

日本基督教団

南西ドイツ宣教会

(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)

日本ナザレン教団

宗教法人みんなの寺

融通念佛宗音羽山観音寺

浄土真宗本願寺派真覚寺

真宗大谷派常念寺

天台真盛宗新光寺

天台真盛宗西念寺

融通念佛宗西方寺

曹洞宗島田地蔵寺

真言宗智山派大聖寺

日蓮宗実相寺

日蓮宗妙興寺

秩父神社

神習教

念法真教

匿名

公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会

日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室

財団法人東北ディアコニア

当講座は、公益財団法人全日本仏教会の推薦団体として認定をいただいております。

ご寄附のお申し込みにつきましては下記までお問い合わせください。

東北大学文学研究科内実践宗教学寄附講座

TEL: 022-795-3831(FAX兼)

E-mail: j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

または

財団法人東北ディアコニア

TEL: 022-263-0520/FAX: 022-263-0521

E-mail: sendai@tohokuhelp.com

## 編集後記



前号から五ヶ月ぶりのニュースレター刊行です。地元の人達からも寒い寒いという声が聞かれた厳しいひと冬が明け、桜が過ぎ、初夏の緑がまぶしい季節となりました。おかげさまで臨床宗教師研修は第3回目に入り、各地の医療機関、福祉施設等での実習がはじまっています。研修で得た経験や発見を糧にして着実に前進されている受講者の方々の姿に、背筋をピンとしなければ、と思わされることがしばしばです。写真は、東北大学川内キャンパスに接する野原で、地震によって崩落した仙台城趾の石垣が、ばらされ、番号をふられ、整列して修復を待っているところです。象徴的な風景です。(た)

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第3号

編集・発行 東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

2013年5月1日

(このニュースレターは右記ホームページからも閲覧できます。)

## 実践宗教学寄附講座運営委員会

学内委員

鈴木岩弓 実践宗教学寄附講座教授(兼任)

谷山洋三 実践宗教学寄附講座准教授

高橋 原 実践宗教学寄附講座准教授

学外委員

川上直哉[委員長] 日本基督教団仙台市民教会主任担任教師  
(財)東北ディアコニア理事長

伊藤文雄 元ルーテル神学校教授

金田諦應 通大寺住職

井形英絵 日本バプテスト連盟南光台キリスト教会牧師

佐藤央千 竹駒神社権禰直

小西達也 (医) 爽秋会チャブレン

金沢 豊 浄土真宗本願寺派総合研究所研究員

篠原祥哲 (公財)世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会  
仙台事務所所長

櫻井恭仁 心の相談室理事(財務担当)

〔事務補佐員〕佐藤千尋

980-8576

宮城県仙台市青葉区川内27-1

東北大学文学研究科内

実践宗教学寄附講座

022-795-3831(T/F)

j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html



東北大学